

Fisheries Science の 2019 年度のインパクトファクターに関するご報告

日本水産学会編集委員会
担当理事 潮 秀樹
委員長 舞田正志

平素より Fisheries Science をご愛読いただき誠にありがとうございます。

本年 6 月発表の 2019 年度インパクトファクター (IF2019) におきまして、英文誌 Fisheries Science のインパクトファクターが初めて 1 を超えて 1.173 になりましたので、編集委員会でのこれまでの取り組みを併せて会員の皆様にご報告申し上げます。

1994 年に英語報文の掲載を日本水産学会誌から独立させて英文誌 Fisheries Science が創刊されました。これまで、編集委員会では Fisheries Science の国際的認知度を上げるための目標として、インパクトファクターの向上に取り組んでまいりました。2002 年に委員会で具体的な取組方針を決定してから、およそ 20 年間の長きにわたり、インパクトファクターは表 1 に示したように 0.7 から 0.9 台にとどまっていたのですが、多くの編集委員と幹事および幹事補佐、査読者、投稿者、読者の皆様のご協力を得て今回の目標達成に至りました。これまで Fisheries Science 誌を支えて下さった皆様に、心よりお礼申し上げます。

編集委員会においては、Fisheries Science に掲載された報文の被引用データの分析から始まり、短報の掲載廃止、論文賞の設置、海外エディターの導入などの大きな改革を 2002 年度に実行しました。2013 年度からは科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) 「国際情報発信強化 (B)」の助成を受けて、学会賞受賞者や各分野の先端研究を行っている研究者の手による総説のオープンアクセス出版と、国際会議での展示プロモーションなどを積極的に行うとともに、雑誌のクオリティを上げる目的で、審査の強化や、投稿者に向けて論文掲載やインパクトファクターを意識した投稿方法を解説するなどの活動にも力を入れてきました。折々の試みについては日本水産学会誌に記事を掲載していますので、興味のある方はご一読ください (表 2)。

さて、この度の快挙の主な要因として、まず総説の掲載が大きく寄与しています。これまでの実績からみてもオープンアクセス出版した依頼総説は数多く閲覧、引用される傾向であることが分かっており、ご執筆いただいた方々には深く感謝いたしております (表 3)。依頼執筆/一般投稿を問わず、オープンアクセス出版した報文の平均 IF は、デフォルトの購読制で出版した報文の IF よりも 2 倍近く高い数字となっています。

また、投稿報文の中にも被引用数が顕著なものがあり、全体として被引用数が上がりました。その中には、2018 年の 84 巻 2 号掲載の特集 “Coastal Ecosystem Complex (CEC)” (ゲストエディター: 渡邊 良朗先生, 山下 洋先生, 河村 知彦先生) も含まれます。

編集委員会では上述したさまざまな取組を通して議論を重ね、実地に得られた反応や編集委員の実感から、インパクトファクターだけが雑誌の価値を決める指標ではないという意見が多数を占めています。しかし、現在の学術雑誌の価値を示す指標であることには間違いはなく、インパクトファクターの更なる向上を目指すことには変わりありません。一方で、世界の水圏生物学系雑誌の中での順位は後ろから数えて3分の1辺りでほとんど変化しておらず（表1）、学術分野全体として被引用数が増加する傾向にあるなかで、この順位を向上させることが今後の課題と考えています。著者の皆様には、出版した研究論文は埋もれさせることなく積極的に引用し、発表していただきたいと存じます。ただ、行き過ぎたセルフサイテーションは、かえって雑誌の評価を下げ、クラリベイトアナリティクスの判断でWeb of Science 掲載誌の資格を取り消されてしまうこともあるということです。ご注意はしていただきたいと思えます。

学会のオフィシャルジャーナルとして、会員の研究発表および議論の場の一つとして、会員に愛される雑誌であろうという考えの下、編集委員と査読者による丁寧な審査と建設的なコメントを提供し、雑誌のクオリティは保っていく所存です。また、2019年からは会員に対しては掲載料を1ページ当たり4,000円と、従来の半額近くまで割り引きましことも改めてお知らせしておきます。

今回、インパクトファクターが1を超えたことにより、Fisheries Science に投稿してくださる方が増え、我が国の良質の水産学研究の成果を世界に発信する場としてより積極的に活用していただけたらと思います。

今後とも Fisheries Science をよろしくお願い申し上げます。

表 1 Fisheries Science インパクトファクターの推移

Year	Vol	IF	Rank	被引用数		出版論文数		5-Year IF	自己引用率	備考
				前年 出版分	前々年 出版分	前年 出版分	前々年 出版分			
2019	85	1,173	35/53	133 (128%)	111 (107%)	104	104	1.198	7.8%	総説(1, 3, 4号)
2018	84	0.929	37/52	90 (87%)	94 (100%)	104	94	1.046	8.7%	総説(5, 6号) 特集(2号)
2017	83	0.794	36/50	62 (66%)	108 (90%)	94	120	0.861	9.4%	
2016	82	0.839	35/50	88 (73%)	125 (93%)	120	134	0.960	8.5%	総説(2号)
2015	81	0.654	41/52	77 (57%)	82 (75%)	134	109	0.822	15.1%	総説(1, 2号)
2014	80	0.878	36/52	82 (75%)	142 (97%)	109	146	0.980	17.0%	特集号(2号), 総説(2, 3号)
2013	79	0.855	36/50	96 (66%)	128 (110%)	146	116	0.996		
2012	78	0.897	33/50	98 (84%)	112 (95%)	116	118	1.023		
2011	77	0.937	33/50	88 (75%)	181 (107%)	118	169	0.978		
2010	76	0.819	30/46	123 (73%)	167 (90%)	169	185	1.004		
2009	75	0.684	34/42			185	182	0.884		Springer で 出版開始
2008	74	0.781	26/40			182	183	0.967		
2007	73	0.766	28/40			183	184	0.926		
2006	72	0.766	31/41			184	162			

表2 Fisheries Science インパクトファクター向上の取組に関する日本水産学会誌掲載記事

渡邊 良朗, 渡部 終五. Fisheries Science の原著論文の分析 : インパクトファクター向上を目指して. 日本水産学会誌 2002; **68**(6): 941-944. <https://doi.org/10.2331/suisan.68.941>

芳賀 穰. AQUACULTURE 2013 参加記. 日本水産学会誌 2014; **80**(3): 394. <https://doi.org/10.2331/suisan.80.394>

佐藤 秀一, 寺島 優美. アメリカ水産学会参加記. 日本水産学会誌 2014; **80**(4): 637-638.
<https://doi.org/10.2331/suisan.80.637>

東海 正. 日本水産学会誌を見直す : インパクトファクターを持つ学術雑誌として. 日本水産学会誌 2016; **82**(4): 653-656. <https://doi.org/10.2331/suisan.WA2305>

木下 政人. 編集委員会主催 *Fisheries Science* 論文投稿セミナー「学会のオフィシャルジャーナル国際誌として *FS* が目指すところ」. 日本水産学会誌 2018; **84**(4): 761-763. <https://doi.org/10.2331/suisan.WA2552>

表3 科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「国際情報発信強化(B)」の助成により Fisheries Science でオープンアクセス出版した総説

<p>Miya, M., Gotoh, R.O., Sado, T. MiFish metabarcoding: A high-throughput approach for simultaneous detection of multiple fish species from environmental DNA and other samples. <i>Fish Sci</i> (2020) (in press). https://doi.org/10.1007/s12562-020-01461-x</p>
<p>Ochiai, Y., Ozawa, H. Biochemical and physicochemical characteristics of the major muscle proteins from fish and shellfish. <i>Fish Sci</i> 86, 729–740 (2020). https://doi.org/10.1007/s12562-020-01444-y</p>
<p>Nakazawa, N., Okazaki, E. Recent research on factors influencing the quality of frozen seafood. <i>Fish Sci</i> 86, 231–244 (2020). https://doi.org/10.1007/s12562-020-01402-8</p>
<p>Endo, H., Wu, H. Biosensors for the assessment of fish health: a review. <i>Fish Sci</i> 85, 641–654 (2019). https://doi.org/10.1007/s12562-019-01318-y</p>
<p>Yatsu, A. Review of population dynamics and management of small pelagic fishes around the Japanese Archipelago. <i>Fish Sci</i> 85, 611–639 (2019). https://doi.org/10.1007/s12562-019-01305-3</p>
<p>Sakai, Y., Yagi, N., Sumaila, U.R. Fishery subsidies: the interaction between science and policy. <i>Fish Sci</i> 85, 439–447 (2019). https://doi.org/10.1007/s12562-019-01306-2</p>
<p>Yoshizaki, G., Yazawa, R. Application of surrogate broodstock technology in aquaculture. <i>Fish Sci</i> 85, 429–437 (2019). https://doi.org/10.1007/s12562-019-01299-y</p>
<p>Kaneko, G., Ushio, H., Ji, H. Application of magnetic resonance technologies in aquatic biology and seafood science. <i>Fish Sci</i> 85, 1–17 (2019). https://doi.org/10.1007/s12562-018-1266-6</p>
<p>Monroig, Ó., Kabeya, N. Desaturases and elongases involved in polyunsaturated fatty acid biosynthesis in aquatic invertebrates: a comprehensive review. <i>Fish Sci</i> 84, 911–928 (2018). https://doi.org/10.1007/s12562-018-1254-x</p>
<p>Katayama, S. A description of four types of otolith opaque zone. <i>Fish Sci</i> 84, 735–745 (2018). https://doi.org/10.1007/s12562-018-1228-z</p>
<p>Winfield, I.J. Recreational fisheries in the UK: natural capital, ecosystem services, threats, and management. <i>Fish Sci</i> 82, 203–212 (2016). https://doi.org/10.1007/s12562-016-0967-y</p>
<p>Hara, A., Hiramatsu, N., Fujita, T. Vitellogenesis and choriogenesis in fishes. <i>Fish Sci</i> 82, 187–202 (2016). https://doi.org/10.1007/s12562-015-0957-5</p>
<p>Aoki, T., Takano, T., Hikima, J. DNA vaccine-mediated innate immune response triggered by PRRs in teleosts. <i>Fish Sci</i> 81, 205–217 (2015). https://doi.org/10.1007/s12562-014-0845-4</p>
<p>Tanaka, H. Progression in artificial seedling production of Japanese eel <i>Anguilla japonica</i>. <i>Fish Sci</i> 81, 11–19 (2015). https://doi.org/10.1007/s12562-014-0821-z</p>
<p>Hughes, R.M. Recreational fisheries in the USA: economics, management strategies, and ecological threats. <i>Fish Sci</i> 81, 1–9 (2015). https://doi.org/10.1007/s12562-014-0815-x</p>
<p>Takeuchi, T. Progress on larval and juvenile nutrition to improve the quality and health of seawater fish: a review. <i>Fish Sci</i> 80, 389–403 (2014). https://doi.org/10.1007/s12562-014-0744-8</p>
<p>Kaeriyama, M., Seo, H., Qin, Y. Effect of global warming on the life history and population dynamics of Japanese chum salmon. <i>Fish Sci</i> 80, 251–260 (2014). https://doi.org/10.1007/s12562-013-0693-7</p>